

## 乳幼児の美的経験 —「芸術の教育的根源について」<sup>1</sup>からの考察—

小 笠 原 文\*

Experience of Art for Infants  
— Reflections from “On the Educational Root of the Art”<sup>1</sup> —

Fumi OGASAWARA

“Can infants show an appreciation of art?” During France's democratization of its education system, “access to art and culture” was one of the last areas to develop during this transition in the country's history. The importance of art education for young children in particular, was not thoroughly focused on or addressed during this time in France.

“Art and culture” is vested in all people, and it is only recently that enough attention has been paid to the importance of art education for children in their early years. This concept of art as an important element in childhood education is extremely late-coming with regards to art education reform in France.

For the first time in 1994, Agnes Desfosses<sup>2</sup> created a spectacle for very young children, from six months to four years old, and gained wide success with her efforts to promote theatrical art for children. As a result of her success, Desfosses was invited to Germany, Portugal, Spain and Belgium to perform. She discovered outstanding concentration, sensitivity and imagination among the young children across Europe, and she confirmed that there were significant relationships between art and the infants she focused on.

This article also considers “children's experience of art” by looking into the concept of Alain Kerlan's work, “On the Educational Root of the Art.” Kerlan's work further emphasizes the importance for children to experience art, and to actively be involved with artistic activities.

キーワード：美的経験、幼児教育、芸術教育

---

\* 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科  
Hiroshima Bunka Gakuen University

Faculty of Arts and Sciences, Department of Childhood Studies

<sup>1</sup> Mr. Alain Kerlan is a French philosopher and a director of education training practice science laboratory (Institut des Sciences et des Pratiques d'Education et de Formation=ISPEF) of the Lyon University.

His study domain is located in the place where pedagogy, art and the education intersect philosophy, and, as for it, a street does a field of sociology and the education philosophy.

In March 2015, I talked with Mr. Kerlan and got permission of translation about “On the educational root of the art”(A la source educative de l'art).

<sup>2</sup> Agnes Desfosses, born in Paris, France. An actor, a director, a photographer. She founded company ACTA and planned “premiere rencontres”, a festival of the theatrical art for infants.

She received the National Order of the Legion of Honour from the French Government in 2014.

## 1. フランスにおける体験型授業

現在、フランスの芸術教育は変革期にある。教室内で教師が実技を指導する従来の芸術教育の授業時間は減少する一方、幼児や児童が場所的かつ時間的に学校の内外で芸術家と交流する「芸術活動」にその方法を移行している。いわゆる「ワークショップ型授業」で、アーティストや研究者が学校に、そして教室、あるいは美術館などに赴き、自らの専門分野について、子どもたちに教え、体験を促す授業形態をとる。カリキュラムの規定が比較的緩やかな幼稚園、小学校においてはこのような授業はめずらしくなく、中学校、高等学校になっても頻度は下がるが行われている。アーティストや研究者に限らず、アスリートが行う場合もあり、ラグビーが盛んなフランスの西南部ではラグビー選手が幼稚園でワークショップを行う姿も見られる。多くの場合、地域色が強く、前出のフランスの西南部を例に挙げると、旧石器時代の史跡の多いこの地方では、在住の考古学者や関連施設も多いことから、旧石器時代をテーマとしたワークショップが幼稚園や小学校でさかんに行われている。ここに「プロ」が授業を行うというフランスのワークショップ型授業の第1の特色がみられる。第2の特色として、幼児教育課程であれば「領域」を、初等教育課程であれば「科目」を縦断して活動を行っている点が挙げられる。例えば、フランスの初等教育の第二課程<sup>6</sup>では「言語活動・フランス語」、「共に生きる」「算数」、「体育」、「外国語あるいは地域言語」、「芸術」、「世界の発見」という7つの教科<sup>7</sup>があるが、ワークショップ型授業は例えば、「言語活動・フランス語」、「芸術」、「世界の発見」といった科目で共通して扱うことができる。第3の特色は、子どもが実際に体験することを重視することである。例えば、旧石器時代をテーマとしたワークショップではその活動の中で、子ども達はトナカイの毛皮に触れ、実際にパーカーを着用する。後期旧石器時代のヨーロッパの気候は氷河期で、今の北極圏のような気候だったとされるが、実際にトナカイのパーカーを着てみると、非常に暑い。そこで、子ども達は当時の気候を体験的に理解するに至る。

子ども達が実際にアーティストや研究者など「プロ」とふれ合い、その分野を極めた人間から

体験という形で知識や感性を共有するというワークショップ型授業は子どもにとって良質の学びになることは明白であろう。一方で、このような授業の最大の問題点は学校格差であり、地域格差とされている。つまり、ワークショップ自体は専門家が行うが、科目を縦断した持続性のあるプログラムにするためには、担任教諭の力量や並々ならぬ熱意を要するということであり、担任によってこのような授業が享受できる子どもとできない子どもが存在してしまうということである。特に芸術教育に関して、近年その「格差」をなくそうという具体的な動きが顕著であるが、それは、教育の民主化政策の中で、芸術へのアクセスの民主化の遅れが根深いものであることの表れであると言える。

## 2. フランスの芸術教育史

2012年11月の閣議にて、フランス文化通信省とフランス教育省は共同で「芸術・文化教育構想」についての発表を行った。

フランスの芸術教育の歴史を紐解くと、芸術や文化は特権階級の所有物であり、それを広く国民に伝える、言い換えれば「教育する」ことについて、フランスの教育政策の中では長らく重要視されてこなかったことが明らかである。フランス革命から第三共和国にかけての教育の民主化政策の中で芸術へのアクセスの民主化は忘れ去られていて、芸術的なものが小学校の教育科目によってよく登場するのは、1880年のジュール・フェリー(Jules Ferry)の教育改革を待たなければならなかった。その扱いも「デッサン・塑像・音楽」は「お裁縫(女子のみ)」科目の次の末席ポジションに申し訳程度に設けられたものであった。1959年にアンドレ・マルロー(André Malraux)が教育相に就任した。「文化」をこよなく敬愛するマルローは国民文化政策を推進し、その中で高等教育における美術教育、すなわち「美術学校(Ecole des Beaux-Arts)」の整備を進めたが、一方で小学校・中学校の芸術教育の改革には手を付けなかった。1968年までこの状態は続き、「音楽」と「デッサン」の授業が細々と続けられることになる。1968年、「新しい学校についての討議」がなされ、その中で「芸術教育は、現代性に目を向け、

芸術家との接点を持ちながら、初等教育から開始されるべきである」とされ、「文化への深い関心と親しみを学校の中でも外でも」をスローガンに、音楽と美術を芸術・文化という文脈の上で教育する「芸術・文化教育」がようやく始動したのは1969年であった。論議の余地を残しながらも、正式な書式に従っての「芸術と文化教育」の普及プロセスは80年代以降から続き、多くの変革を経て現在に至るが、「芸術教育」の重要性や必要性については、同じような理由付けが繰り返され、行き詰まった印象さえ受ける。

一方で、この分野は学校教育機関の中で常に「構築中のプロジェクト」であり、「大きな志」であり続けていた。今回の「芸術・文化教育構想」はフランスの芸術教育の停滞感を打破するものになり得るのであるか。この「芸術・文化教育構想」に先立って、フランスの学校教育機関では2008年から芸術教育について2つの変化が見られた。フランスにおいてもPISA型学力の重視傾向は例外ではなく、その影響から2008年、「芸術教育」の授業時間数が削減されたのを機に、「構想中のプロジェクト」は具体的な施策となり大きな変化が見られた。第一は「芸術史の義務化」であり、第二は「芸術活動の強化」である。第一の「芸術活動の強化」とは、16時以降の補足的教育活動<sup>iv</sup>の枠を用いて芸術活動を展開するもので、2008年の新学期から、指定された重点校（小学校・中学校）で試験的に開始された。専門の教員採用も増やし、将来的には200から800のクラスを目標としている。活動内容としては、音楽、造形美術、演劇など多様な分野を想定し、その活動をより充実したものとするために、地域の文化施設や、芸術作品、アーティストとの交流の機会を定期的に創出することを掲げている。また、学校機関が、政府による文化政策の主要軸となるよう、2009年までには、すべての学校の教育課程の中に、文化施設との共同プログラムを組み込むものとされた。

第二は、フランスの小学校では2008年度に、コレージュおよびリセでは2009年度より「芸術史」が義務化されたことである。この義務化の目的としては「子ども達に多彩な芸術文化、文明及び宗教との出会いを経験させることで美的嗜好の多様性を認識させ、寛容な精神を育むこと」が掲げられている。コレージュでは、歴史の授業の4分の

1、音楽・美術の授業の半分を「芸術史」が構成するものとし、2010年度からは前期中等教育修了国家免状で試験科目となった。初等中等教育における「芸術史」履修の義務化は教師と子どもたち双方にとって、大きな変化であったと言えよう。2009年4月4日から授業に必要な知識等を得るための条件を整備するため、教員の国立美術館及び建造物の入館・観覧料の無料化という措置がとられている。当時の教育大臣グザヴィエ・ダルコス（Xavier Darcos）は教員が文化への理解を深めることの重要性を示し、「教員は一般の観覧者とは違い、教育者であり、文化の伝達者であること、そして子どもたちの判断力を培う役割を担っている」と述べている。この芸術史必修化については、「芸術史は、フランス語、歴史、地理、音楽、美術、語学、また科学の分野で扱う横断的な教育で導入されることが望ましい」とされ、さらには学校内外の「芸術活動の強化」についてその方針が示された。

2013年施行の「芸術・文化教育構想」は2008年に打ち出されたこの「芸術活動の強化」を受け、それをさらに推進させたものと考えられる。これら一連の芸術教育改革について、フランスの教育哲学者アラン・ケルラン（Alain Kerlan）は以下のように述べている。「芸術的かつ文化的な実践が明白にして義務的な形で、国および地方の教育政策に浸透した」（A. Kerlan, 2013）

### 3. 乳幼児と芸術ー「ヨーロッパビエンナーレ・はじめてのであい」よりー

このようにフランス芸術史を俯瞰すると、遅れた「芸術へのアクセスの民主化」の中でも、特に幼い子ども達と芸術と呼ばれるものの間には大きな隔たりが存在していたことが判る。初等・中等教育で「芸術活動の強化」という方針のもと、子どもの芸術体験について、芸術教育として整備が進んだのが2008年であった。

一方で80年代以降には、初等教育にも達しない、ごく幼い子ども達が芸術に親しみ、体験する重要性に着目した活動が芽生えていた。その活動の一つを紹介したい。

1989年にアニエス・デフォス（Agnès Desfosses）は劇団ACTA（Association de Creation Theatrale



et Audiovisuelle)<sup>v</sup>を創設した。劇団ACTAは、演出家、舞台構成家、劇作家、作曲家のチームにより編成され、コンテンポラリーで、多元的な領域に渡り、写真も取り入れた舞台芸術の創作を行っている。デフォスは音楽、造形、ダンス等さまざまな芸術家と共同作品を発表し、視覚的、聴覚的、身体的な芸術言語の総合した舞台芸術の演出を行ってきた。その経歴の中で、彼女は1994年に6か月から4歳の乳幼児のためのスペクタクルを初めて創作して成功を収め、ドイツ、ポルトガル、スペイン、ベルギー等に招かれて上演することになる。幼い子どものすばらしい集中力、感受性、想像力に出会ったデフォスは乳幼児と芸術が接続し得る関係であることを確認するに至る。

「乳幼児は芸術の鑑賞者になり得る」という確信をもとに、Villiers le Bel市<sup>w</sup>で、乳幼児のための舞台芸術の祭典「はじめての出会い：芸術・乳幼児・生のスペクタクル・フェスティバル」を企画し、2003年以来隔年に催している。

劇団ACTAは、1992年から2014年の間に、非常に幼い子どものためのスペクタクルを10数作品創ってきた。劇場芸術監督のジャン＝クリストフ・テレズ（Jean-Christophe Taillez）は次のように述べて、非常に幼い子どもが芸術の鑑賞者となり得ることを示唆する。「3歳前も子どもは存在します。彼らは独立した完全な人間で、我々の関心やスペクタクルを創造する人の関心を十分に惹く価値のある存在なのです。」「スペクタクルをこのように子どもに向けて行うことは、彼らを信頼しているのです。彼らは、たとえ我々や保育者や親のように解釈できなくても、スペクタクルが提供する情緒、美の時間を大人と同様に、楽しみます。」

デフォスはフェスティバルでの22年間の探求や発展の経験を以下のように振り返る。

①フランスのアーティストやフェスティバルに招待された外国のアーティストたちが、アートのアトリエを提案し、次第に、作品を通して乳幼児に携わる職業の人や乳幼児期の職をめぐす学生たちが一緒に感覚的で想像的な活動するようになった。

②保育者は、子どもを連れてスペクタクルに行くことで感情や感性を大切にできるようになり、次第にストレスが減って楽しみが強まった。

③芸術的な質の高さへの要求がすべての人に高まった。すなわち、幼い子どものための舞台芸術は内容のない質の低いものではない、という意識が高まった。

④保育園や幼稚園は、子どもと直接接しながら創作したいと思うアーティストたちを受け入れるようになった。保育園や幼稚園は今では、子どものためにもまた園のためにも、そこに有益さを与えて、要求するようになった。

これらを受けて、デフォスは「生の舞台芸術は、今日では、幼い子どもたちの文化的な生活の一部になった」とする。

## 4. 子どもの美的体験とは

このように、子ども達が芸術に親しみ、体験する活動を行う上で、重要になってくる概念は「子どもの美的経験」であるが、この「子どもの美的経験」は実践の前提として、どのように理解されるべきものであるのか。

ケルランは「美的なるもの」の特徴を以下3点に分けて説明する。

### 4-1. 第一の概念 美的次元は関係性にある

第一にして不可欠な基本概念として、ケルランは、ジャン＝マリ・シェフェール（Jean-Marie Schaeffer）の考察に着目する。：《審美観（l'esthétique）》は、態度、美的行動の相関関係としてのみ存在する。あるシーンの、ある物体の、ある自然の風景の、芸術作品でさえ、その“美的な”特徴は、それらに対する態度や注意のタイプ、選んだ行動によって決まる。重要なのは、いわば行動の形であり、世界での在り方、世界の見つめ方、自分の意向との固有で明確な関係の取り方、全く違うタイプの関係の取り方である。》（J.-M. Schaeffer 2000、イタリック体は原文のまま）シェフェールは以下のような具体例を挙げて説明する。《モナリザ（La Joconde）自体は、ある見方をすれば一枚の板に過ぎない。逆に単なる小石、浜に打ち寄せられた木片は、威厳ある美的オブジェになりうる。わたしがそれらに向ける注意のタイプによりけりだ。》つまり、《美的次元は関係性にあるのであって、物体の属性にではない。》とする。

以上のことからケルランは美術教育というものを「ある行動の、ある意図の、世界とのつながり方の学習である。」とし、さらに「むしろ発展 (le développement)、第一義的な意味での《耕作 (culture)》、我々の人間性、人間であるという我々の心的機能に備わっている資質の開花に託された仕事である。たしかに資質はあっても、《耕され cultivée》なければ、しぼんでしまうだろう。」と結論づけている。

「ある世界での自分の在り方、世界の見つめ方、世界との関係の取り方」について、子どもたちに示唆を与えうる例として、前述の劇団ACTAの作品を挙げる。

タイトル：巨人と小人Géant et Minuscule

テーマ：人はいつも誰かより小さく、誰かより大きい

作者：アニエス・デフォス

制作年：1992年

対象とする観客：4～6歳の子ども30人程度と付き添いの大人

概要：「小人たちが見る空に浮かぶ巨大な目は誰の目だろう？子どもたちの目だ。スペクタクルの間、子どもたちは「巨人」に変身する。小人たちは人々の内側に住んでいる。彼らの寸法の宇宙に。観客の子どもたちはその新しい世界を発見し、触り、手から手へと渡す。小人たちは、巨人の視線を怖がる。イガという名前の一人の小人は、雨の一しずくが当たって、巨人になった。そして、小人と巨人は互いに異なることが豊かさを生むということを学んで、仲良くなる。」

芸術的な形態の特徴：造形美術と演劇の融合。演技者と観客は同じ舞台空間に存在する。観客はこの物語のなかでは「巨人」となる。この物語は作家のイヴ・ニイイ (Yves Nilly) に依頼し、IGAというキャラクターが創作された。

#### 4.2. 第二の概念 美的行動は認識行動の一形態であり、情緒的に満たされている

美的なるものの第二の特徴として、ケルランはシェフェールの以下の言及から示唆を得ようとする。「美的行動は認識行動の一形態である。美的

行動はいずれも、《認識判別、判断力機能》を発達させる。《見る、聞く、触る、感じる、味わう》、あるいは他のいかなるタイプの感覚的注意力であろうと、我々は常に《基本的な様態と関わって、周囲の世界を認識する》。(J-M. Schaeffer 2000) 「ではどの点で、美的行動は認識行動と厳密な意味において違うのか？それは美的行動に包まれた認識活動は、情緒的に満たされているということ、再び求められるということ、価値があり、《それが引き起こすことができる喜びでより価値を高めるとのことだ》。」(J-M. Schaeffer 2000、イタリア体は原文のまま) この言及について、ケルランは美的行動に関して「ジョン・デューイ (John Dewey) は彼流にすでにそのことに言及していた。美的経験は知性的であると同時に情緒的な経験であり、この漠然さが根源にあり、基盤になるのだ。」とし、『『経験としての芸術』の著者は日常的ではあるが美的次元に至るに十分な、たとえば暖炉の中で薪をいつまでもかき回すことにとらわれている行動のような、本物にして《充実した》いくつかの経験を想起して、喜びと認識のこの漠然さが美的経験者の証だとする」と述べる。(A. Kerlan 2013) ケルランは「この特性は教育思想に理論の基礎づけを可能にするものであるとし、その教育思想に従えば、芸術教育は知的作業と喜びの結びついた状況で、遊びに近い感覚状況で認識機能の発達を可能にするだろう。」と、美的経験を基盤とする芸術教育の可能性に言及する。

#### 4.3. 第三の概念 美的なるものの特徴は日常の中にあり、幼年期にこそ重要である

美的なるものの最後の特徴として、ケルランは以下のように述べる。「美的なるものは、ただ《豊かな教養》だけに属するものではなく、それどころか《日常的な》生活経験にもつきまといっているものだ。さらには成年のみならず幼年期にこそ重要なのだ。」

ケルランは芸術と生活が一体になっているとか、子どもは生まれながらに芸術家なのだと言っている訳ではないと断った上で、「ごく単純に《人間の精神的な横顔》特有の行動としての美的行動は幼年期と日常経験において根を張るのだということが重要なのだ。」とする。ここでもケルラン

はシェフェールの以下の言及を引用している。《それら美的経験はとりわけ豊かなものでないにしても、心に残るものであり、また最も強い意味では我々成人の美的生活を知らぬ間にではあっても大まかに方向づけるもの》

ここからケルランは芸術教育の教育的使命は「まずは子どものため、それに続くわれわれ大人の美的生活のためにも、幼年期において美的経験のこの時期を涵養することである」とし、「教育するための足場にしないといけないのは、美的経験の特性および、どの子どもにもある美的行動に対する人間的素質なのである。美的教育はその人間学的な土台にあって美的行動の再認識をおこなうのだ。」と結論づけている。

## 5. 教育の基盤としての「美的経験」 —まともにかえて—

シェフェールは美的行動について、「人間の特有な、普遍的な、基本的な行動である」とする。そして彼は美的行動を「人間の精神的な横顔」という表現で表す。つまり、「どの子どもにも美的行動に対する人間的素質が備わっている」ということである。この考えに従えば、美的行動や美的経験は教育の基盤に据えることができるということになるであろう。そしてここで重要になってく

るのは、教育者や保護者は子どもの美的経験の傍観者ではなく、自身も美的経験をするということである。

フランスの教育はその基盤として「美的経験」に可能性を求めている。既にデフォスが2003年に始めていたスペクタクルのような、子どもに豊かな美的経験を与える機会を、フランスは「教育」という枠組みで整備し、出来るだけ等しく子ども達に与える試みを始めている。

真の美的経験の機会を子ども達に与える事が重要であるということは確認できたが、その方法については、多くの制限や条件を抱えた教育・保育施設においては、真摯に検討しなくてはならない課題であろう。

## 参考・引用文献

- Alain Kerlan, “A la source educative de l'art”, Staps, 2013/4 n° 102, pp.17-30  
 アラン・ケルラン、小笠原文、「芸術の教育的根源について」、広島文化学園大学大学院教育学研究科、子ども学論集第2号、2015、pp. 69-83  
 小笠原文、「フランスの美的教育がめざすもの～フランスの美的教育の現在～」、広島文化学園大学紀要 第5号、2015、pp. 23-27  
 第68回日本保育学会プログラム、pp. 32-33

- <sup>i</sup> 論者は2015年3月にアラン・ケルラン氏とリヨン第2大学にて対談し、STAPS誌102号（2013年）に掲載されたアラン・ケルラン氏の論文「芸術の教育的根源について」（À la source éducative de l'art）の翻訳の許可を得た。  
<sup>ii</sup> フランスの初等学校は「幼稚園」（第一課程）と「基礎学校」（第二・第三課程）から編成される。

第一課程 Cycle 1	Toute Petite, Petite, Moyenne et Grande Sections	プレ幼稚園 幼稚園年少～年長
第二課程 Cycle 2	Cours Préparatoire, Cours Élémentaire 1	小学校1年 小学校2年
第三課程 Cycle 3	Cours Élémentaire 2, Cours Moyen 1, Cours Moyen 2	小学校3年 小学校4年 小学校5年

- <sup>iii</sup> 2009年より「共に生きる」（週30分）という科目が新たに加わり、週あたりの授業時間も従来の24時間から26時間に増加した。  
<sup>iv</sup> APC（Activite Pedagogiques Complementaire）「補足的な教育活動」と訳される。  
<sup>v</sup> Association de Creation Theatrale et Audiovisuelle、演劇・視覚芸術創作協会  
<sup>vi</sup> パリ北部、イル・ド・フランス地域に属する市。低所得者世帯も多く、社会的な問題も散見する地域であるが、一方で、芸術・文化フェスティバルが受け入れられ、継続していることは注目に値する。